

## 実習を含む少人数型授業の展開

特別支援教育講座・山下 光

### (1) 授業の概要

この授業は、大学院教育学研究科特別支援教育専攻の特別支援教育コーディネーター専修（1年制課程）、特別支援学校教育専修（2年制課程）の合同授業である（前期開講）。登録受講生は9名であった。内訳はコーディネーター専修が6名（全員が現職教員）、特別支援学校教育専修が3名（現職教員，社会人が各1名）であった。

この科目は「発達障害検査法演習 1（吉松靖文准教授担当）」、「発達障害検査法演習 2（山下担当）」に連動しており、それらの科目で取り上げられる検査法の、理論的基礎の理解と、基本的なスキルの習得を目的としている。

昨年度は、他の教員が担当していたが、課程認定にともなう担当科目の見直しによって、本年度より著者が担当となった。

当初の授業のスケジュールは以下の15回であった。

1. 心理アセスメントとは
2. 心理テストの種類と性質
3. 神経心理学的検査とは
4. データに関する考え方
5. 記述統計の基礎 1（代表値）
6. 記述統計の基礎 2（散布度）
7. 検査の信頼性と妥当性
8. 知能検査法
9. 記憶検査法
10. 視覚認知機能検査法
11. 実行機能検査法
12. ロールプレイ 1
13. ロールプレイ 2
14. ロールプレイ 3
15. 結果のまとめ方

テキストとしては、特別支援教育士資格認定協会編「特別支援教育の理論と実際：I 概論・アセスメント」（金剛出版，2007）を使用した。

また、参考文献として、村上宣寛「IQってホントは何なんだ：知能をめぐる神話と真実」（日経BP社，2007），吉田寿夫「本当にわかりやすいす

ごく大切なことが書いてあるごく初歩の統計の本」（北大路書房，1998）を指定した（参考文献に関しては、教員所蔵のものを貸し出し可能とした）。

また、プリント（主にパワーポイントのプリント・アウト）を適宜配布した。

### (2) 授業の展開

本年度初めて担当する科目であり、また少人数でもあるため、受講生の反応をみたり、要望を聞きながら、授業を進めた。また、疑問点については、随時質問することを奨励した。

そのため、必ずしもシラバス通りの進行にはならなかった。その点については、毎授業終了時に受講生と相談して、次回の内容の調整を行った。

特に、予定の変更を余儀なくされたのは、アセスメントの理解に必要な統計に関する部分であった。2回の授業を予定していたが、受講生からの質問等も多く、実際には4回を要した。

例題を提示し、実際に電卓で計算を行いながら進行したが、受講生の予備知識に差があったことから、予想外に時間がかかった（また、残念ながら十分な理解につながらなかった受講生も少なくなかったようである（アンケート結果を参照））。

そのため、ロールプレイは実際には1回のみしか行えなかった（実行機能検査）。

また、検査法に関しても、視覚検査は省略した。記憶検査に関しては、記憶に関する基本的な説明のみにとどまった。

授業では自作のパワーポイント・プレゼンテーションと液晶プロジェクターを使用した。

### (3) 受講生による授業評価

授業最終日に実施したアンケートでは9名全員から回答が得られた。

①「授業にはよく出席しましたか」という質問には、9名中9名が「はい」と回答した。

実際の出席率も、3名に1回ずつの欠席（病欠、実習打ち合わせ等）があったのみであった。また、受講生の態度も非常にまじめであった。

②「テキストは適切でしたか」という質問には、

9名中8名が「はい」と回答した。

しかし、「配布資料の量が多すぎる」、「パワーポイントのプリントアウトが小さすぎたり、不鮮明な事があった」という意見・要望もあった。

③「教員の説明はわかりやすかったか」という質問には7名が「はい」と回答した。

④「内容は難しかったですか」という質問には3名が「はい」と回答した。

⑤「教員が熱意を持って取り組んでいるか」という質問には9名が「はい」と回答した。

⑥「小テスト、レポート、試験などは適切でしたか」という質問には9名が「はい」と回答した。

⑦「学期全体での授業構成は適切でしたか」という質問には7名が「はい」と回答した。

⑧「この授業があなたが知識を得るのに役立ちましたか」という質問には9名が「はい」と回答した。

⑨「この授業を友人・後輩に勧めますか」という質問には9名が「はい」と回答した。

自由記述欄では、やはり統計に関する内容（代表値、散布度、検査の妥当性と信頼性等）について、要望や意見が多かった。具体的な内容は以下の通りである。「もう少しわかりやすく説明してほしい」、「数学的な知識がないと難しいと思う」、「有意水準の意味がわからなかった」、「大切なことだとは思いますが、難しかった」、「パソコンでの計算方法が教えて欲しかった」、「場面によってどのような手法を使えばいいのかについて、参考になる本を紹介してほしい」。

また、その他にも、以下のような要望や指摘があった

「アセスメントの報告書の書き方についてもっと詳しく説明してほしい」、「アセスメントの結果を個別の指導計画にどのように取り入れていくかについて、もっと詳しく説明してほしい」、「知能検査と脳の働きの関係についての説明が一部わかりにくかった。テキストの説明と先生の意見が違っている点があるように思ったが、その点についてもう少し詳しく聞きたかった」、「脳の画像診断の話が、少しだけ出てきたが、興味のある話なのでもっと詳しく話してほしい」

授業を効いて良かった点については以下のような解答があった。

「現場の研修会などでは理論的な話はほとんどないので、新鮮だった」、「市販されているテストというのは絶対に正しいものだと思っていたので、問題点も多いという話を聞いて、結果の解釈に慎重になるべきだと思った」、「知識が増えたよ

うに思う」、「パワーポイントの写真がきれいでわかりやすかった」、「これまで、あまり注意していなかったことで、いろいろと考えさせられることがあった」、「検査については理屈を知らずに使っていたので、勉強になった。ただ、問題点を知って、不安になった部分もある」、「この授業で習った知識で、他の先生の授業がわかりやすくなった」。

#### (4) 反省点と総括

初めて担当した授業でもあり、内容的に少し欲張りすぎたのではないかと反省している。特に統計に関する部分では時間をかけたわりには、担当者もまた受講生も満足感が少なかったのではないと思う。今年度は基礎的な理解を促すという点から、電卓を使用した授業展開を図ったが、担当者自身もその効果を実感することが出来なかった。

後で確認したところ、全員がノートブックコンピュータを所有し、またしばしば持って登校していることがわかったので、来年度からは表計算ソフトを使用した展開を構想している。今年度の授業で、表計算ソフトを使用しなかった理由の一つは、現職教員の受講者が多いので、操作を改めて指導する必要はないだろう（成績処理など普段から使用しているだろう）と考えていたからである。しかし、実際には表計算ソフトをほとんど使用した経験のなかった受講生もおり、指導が必要なおことがわかった。

担当者として残念だったのは、年度末の修論発表において、授業内容が十分に生かしていないものがあつたことである（検査結果の示し方、統計処理における代表値や散布度の使用、検査結果の解釈等）。

単に教科書的な知識を習得するだけではなく、実際の指導や実践研究に活用できるような指導を、今後どのように進めて行くのかという点が大きな課題として残った。

それに関しての一つの試みとして、来年度は日本特別支援教育学会、日本LD学会などの学術雑誌に掲載された優れた実践研究（特に、大学院の修論研究として行われたもの）を教材に採り入れることを考えている。受講生と一緒に分析することで、その中で使用されている手法や、結果の解釈、図表の効果的な使用法などを親しみやすく、かつ実践的に学ぶことが可能ではないかと考えている。

また、今年度の経験を生かして、シラバスの調整を行い、出来る限りそれに従った円滑な進行情がけたい。